

誕生日短編 2020—サンプル—

もくじ

カー・アミルク	P
捨て犬保護施設	P
キス・イン・ザ・ダーク	P
新作玩具体験会	P
	29
	14
	11
	2

## カルーアミルク

「諒」

「はい」

眠る前——寝かしつけてもらいう前の甘い時間。ぎゅうと抱きしめてもらい、篠崎の腕と空気に包まれて心がしっとりと満たされていく。

「もうすぐ誕生日だろう。何が欲しい？」

「え……」

誕生日——すっかり忘れていた。そういえば、あと一週間で誕生日だ。

「えっと……」

欲しいものは何もなかった。けれどもし逆の立場だったら、何もないと言われると困ってしまう。

（うーん……）

でも本当に何も浮かばない。大好きな篠崎は相変わらず優しくて、甘くて、毎晩こうして抱きしめてくれている。それだけでもう十分だった。

「一緒にいてほしいです」

「それは当然だ。誕生日と翌日を休みにしてあるよ」

「二日も？」

「世話が必要になるだろう」

「え……？ ……あっ！」

言われてすぐは意味が分からなかった。でも、もう篠崎に愛されることに慣れたせいか、すぐに言葉の意味を悟る。

「いらないか？」

「や……その……それは……」

その質問の本当の疑問はどこなのだろう。いらないのは行為自体についてなのか、それとも世話を必要とするほどの行為のことなのか、言葉通り、世話がいらないという意味なのか——。

「俺はそのつもりでいたんだが」

「っ……そ、そのつもり……」

どういうつもりなのだろう。一日中ベッドから出られなくなるくらい……そういうことをする、という意味なのか。

「ちゃんとするよ。食事の支度もするし、風呂もトイレも連れていく」

「っ……」

もう寝る時間——安西が眠りに就いたら篠崎はまた仕事に戻るはず——だというのに身体がどんどん熱くなっていってしまう。

「諒、熱いか」

「あ……」

パサ、と剥ぎ取られた布団。空気が肌に触れ、身体の火照りが楽になる。

「諒」

篠崎の手が頬に触れた。そのまま顔を篠崎の方に導かれるけれど、恥ずかしい。今の顔は見られたくない。

「や……」

グツと顎を引くと、篠崎が小さく笑った。

「こら」

笑いの含まれた穏やかな声。まるで子供扱い。

「諒、それとも今年の誕生日は子供の諒くんで過ごそうか」

「あ……子供……？」

「そう。部屋中を飾り付けて、誕生日パーティーをしようか。大きなケーキにろうそくを立てて、ふーと一息で消して、プレゼントを渡して。ジャンクフードをたくさん食べて、おもちゃで遊ぶ」

篠崎の言葉のまま、頭の中にその姿が浮かんできた。毎月行われる「子供の日」の盛大パーティー。少しだけ魅力を感じてしまう——けれど、子供の日で過ごしたら、きっと大人なことはしてもらえないだろう。

「……篠崎、」

「ん？」

「……大人がいい……」

これではまるでおねだりだ。けれど意地を張ったせいで篠崎に触れてもらえなくなるのは嫌だった。

「大人？」

「ん……」

もうこれで分かってくれるだろうと胸に顔をすり寄せて甘える。

「……大人、じゃ分からないな」

「え」

聞き間違いかと思った。だっていつも篠崎は安西の気持ちを先回りして読んでくれる。しかもここまで言葉にしたのだから、ちゃんと受け止めてくれると思っていた。

「言ってごらん、諒くん。ちゃんと」

「あ……」

えっちな篠崎だ、とすぐに分かった。いやらしいことをしたいと思っただけのときの篠崎。

「や……」

この篠崎は、苦手だ。かつこ良すぎて、ドキドキしすぎて、どうしたらいいか分からなくなってしまうから。

「や、しの……」

「諒」

「っ……」

落ち着かない気分になった。何か——ああ、さっき布団を取ったのは、もしかしたら逃げ場をなくすためだったのかもしれない。逃げるときは布団の中……それがもうバレてしまっているということだ。

「や、篠崎っ」

布団がほしくて上体を起こそうとしても、篠崎の腕が邪魔をした。まるで逃がさないというかのようになぎゅうつと力を込めて引き寄せられる。

「っあ……」

「諒くん。どうして大人として過ごしたいのかな」

「っ……やだあ……」

恥ずかしくてそんなこと言えない。言ったら、今すぐ欲しくなってしまう。でも篠崎はこのあと仕事だから。熱を持て余したまま眠るなんてできないし、篠崎の仕事が終わるのをただ待つのもつらい。だから興奮させないでほしい。

「……可愛い。まだ諒くんは子供だな」

「あ……」

篠崎の空気がふつと軽くなった。小さく笑われ、子供にするようにこめかみにキスをされる。

「さあ、諒くんねんねだよ。プレゼントは考えておいてくれ」

「あ……」

子供扱いになってしまった。下腹部がむずむずする。でもおねだりはできない——。

「篠崎……」

「うん、おやすみ。愛してるよ」

「……僕も……」

額と頬にキスを受け、もやもやした気分のまま目を閉じる。

「……おやすみなさい」

~~~~~

## 捨て犬保護施設

「郁くん、どのケーキが気になる？」

「わう」

取り寄せたケーキ屋のパンフレットを数枚床に広げると、郁は不思議そうな顔で覗き込んだ。

「……ケーキだよ。初めて見たかな」

知らないかなと訊けば傷付ける気がした。そんな風に言葉の選び方一つにも気を遣うよう

になったのは郁に出会ってからだった。

「これがイチゴ……郁くんの好きなイチゴヨーグルトに入っているのはこのイチゴだよ」

「わうっ！」

郁がチラシに鼻を寄せた。スンスンと匂いを嗅いでいる。

（可愛い……）

本当に子供だ。純粹で、穢れのない。

「これはね、写真だよ。ケーキの写真。郁くんの写真も私の宝物として置いてあるだろう」

「わう」

「それと同じだよ。——郁くんはイチゴがいいかな。チョコレートも好きだったね。これはチョコレートのケーキだよ」

「わうう」

まだ写真の意味は理解できないらしい。また同じようにチラシに鼻を寄せて匂いを嗅ぐ。でも当然匂いを感じ取ることはできないので、その姿は可愛いと思いつつ、可哀想にも思ってしまう。

「……どちらも買おうか」

郁が梅沢を見た。買う、というのもよく分からないに違いない。そう思うと胸が締め付けられる。でも同時に、その無垢さも愛おしくて。

「郁くん、郁くんのお誕生日をしようと思って」

反応はなかった。恐らく意味が分からずどうにもできないのだろう。

郁の誕生日を、と思ったのは先日のことだ。テレビから誕生日という単語が聞こえてきたときに、郁の正確な誕生日を知りようがないことに気が付いたのだ。生まれてすぐに業者に売られ、そのまま犬として生活していたというのだから、恐らく誕生日というものの存在すら理解していないだろう。でもそれなら、一年に一度、大切な日を作ったかった。でもそれをいつにするか——ここに来た日はまだ郁は怯えていたし、その日を待てばまだまだ先になってしまう。それならここに来た日を毎月祝ってしまおうと思ったのだ。今までの分も取り返せるように。だから、一年に十二回誕生日を祝う。二年ほどで実年齢に追いついてしまうけれど、それでも今まで郁が得られるはずだった幸福を満たすにはまだまだ足りない。だから、これからずっと、毎月同じ日を祝い続けよう。

「郁くんのお誕生日。郁くんが生まれてきてくれた日。本当の日は分からないけれど、ここにきてくれた日を誕生日にしようと思って」

細かいことを言っても今は混乱させるだけだろう。とにかくお祝いで、楽しく過ごすんだよ、と言うと不思議そうにしながらもペロリと頬を舐めてくれた。

「じゃあ、今回はイチゴとチョコレートにしよう。いろんなケーキがあるから、他のはまた来月ね」

くくく

## キスインザダーク

「来月、連休取れるか」

そう言われたのは先月の初め。最初は一体どうしたのだろうと思った。でも三崎に指定された日に休みたい旨を店長に伝えた際、「せつかくの誕生日だもんな」と言われたことで理由を知った。

(すっかり忘れてた……)

もう誕生日を喜ぶ年でもない。年を取りたくないと思うこともないけれど、年を取ることを嬉しいと思う年でもない。

(覚えててくれたんだ……)

ただ、輝が自分でも忘れていた日を三崎が覚えていてくれたということが嬉しくて。でも同時に気を遣わせてしまった申し訳なさや、きつと用意してくれるであろうプレゼントにも——これは用意してもらったことも、輝が使えるものや喜ぶものを考えさせてしまうこと自体も申し訳なくて。

(一緒に過ごしてもらえればそれだけで嬉しいんだけど……)

普段から多忙を極める三崎の体調も心配なので、もし三崎も連休を取れるというのなら何もせずただゆつくりのんびりと過ごしてほしい。

(あ、もしプレゼントの希望を訊かれたらそう答えよう)

それならいい。ただ三崎は「ベッドで休む」というとなぜか閨事を思い浮かべてしまうようなので、きちんと説明をしなければならいけれど。でも三崎は輝の言葉を途中で遮ったり、正面から全否定したりするような人ではない。だからきつと、しっかりと話せば理解してくれることだろう。

(うん、そうしよう)

そう決意したものの、結局誕生日の一週間前になっても何も言われることはなく、いよいよ明日は誕生日前日という日になってしまった。

「輝、明後日からちゃんと連休取れてるな？」

「はい」

誕生日という言葉が使われない以上、輝の方から「何もしなくていい」と言い出すことはできなかった。だから、一体何があるのだろうかという期待と、申し訳なさ半分ずつ残ったまま。

(……いや、でももしかしたら偶然他の用事が被っただけかも……)

考えてみたら、誕生日を伝えたことがなかったような気がする。三崎の誕生日は以前尋ねて知っているけれど、そのときに訊き返されなかったのだ。ちよつと寂しいなと思ってしまったので、それははつきりと覚えている。

(つてことは……やっぱり用事が入ったのかな)

でも輝にまで休ませる用事なんてあるだろうか。出張でも入ったのだろうか。でも三崎が

帰って来られない日は普段からある。今回休みを取るように言われたのは二日間だけだし、それなら三崎の不在もせいぜい一泊か二泊といったところだろう。子供ではないのだから、それくらい一人で過ごすことはできる。

（念入りの掃除はちよつと難しいけど……）

でも目が見えずとも一通りの家事はできるし、言い方は悪いけれど、一日や二日、家事ができなくなつて死ぬことはない。食事はコンビニで買つてもいいし、どうにでもなる。そもそもここに来るまではずっと一人暮らしだったのだから。

（うーん……じゃあやつぱり誕生日……？）

「輝？ どうした」

「あ……いえ……その、何かありましたか？」

「え？」

「もし出張なら荷物を準備した方がいいかなつて」

色や形が分らないので、三崎の服を準備してやることはできない。でもパジャマとかタオルとか洗面用具くらいなら準備しておいて、あとで三崎にチェックしてもらえばいい話だ。しかし三崎は不思議そうな声を出した。

「出張？ 誰が？」

「隆司さん」

「……輝……。まあ確かに出掛けるが、それは明後日の昼間だけだよ。それに荷物は何も必要ない」

「そうですか」

どこに行くのだろう。普段なら「そろそろ気温が変わってきたから服を買いに行こうか」とか「スイーツの食べ放題がやっているうだから食べに行こうか」とか具体的な内容を教えてくれるのに。

「あの……どこへ？」

「ああ、じいさんのところだよ。じいさんの家だから気楽だろう」

「え？ あ、はい……梅ちゃんもいますか」

「いるよ」

「やった」

源一郎も優しくて大好きだけれど、源一郎の飼っている犬の梅助は本当に賢くて、ふわふわで可愛いのだ。顔が見られないのは悲しいけれど、きっと源一郎の家の犬だから凛々しくてかっこいいのだろうと思っている。

「梅助と遊びたいか」

「はい！」

「それなら梅助の散歩に行こうか」

「え、でも……」

行つていいのなら行きたい。けれど自分一人で歩くだけで精一杯なのに、盲導犬でもない梅助と歩けるとは思えなかった。自分が転んで怪我をするのならかまわないけれど、もし梅

助に何か起きたらと思うと――。

「大丈夫、俺も一緒に行く。それに庭を歩いたらいい。広いから十分散歩になる」

「そうなんですか？」

「ああ。梅助もきつと喜ぶ」

庭なら安心だった。植物を踏まないようにだけ気をつければ、梅助も慣れた庭だし安全だろう。

「楽しみです！」

源一郎の家に行くのは久しぶりだった。たまに電話をもらってはいたけれど、会うのは久しぶり。顔を見られるわけではないから電話でも同じといえど同じなのだけれど、やはり雰囲気とか、そういったものを感じたい。

「あ、お土産買わなきゃ！」

「気にするな」

「ダメですよ！ お邪魔するんですから。何にしようかなあ……」

何がいいかな、と考え始めると三崎がくすりと笑った気がした。

~~~~~

## 新作玩具体験会

「慶人くん。来週お誕生日だね」

「あ……はい」

知っていたのか――そういえば、宗形は立場上、慶人の履歴書を見ることができたことに気付く。思い返してみれば付き合い始めたきっかけも家に来てくれたことだった。

「水曜日だけど、お友達と遊びに行くのかな」

「あ……」

声は掛けてもらっていた。けれど、宗形と過ごしたくて曖昧な返事で濁してあるのだ。平日なので宗形は仕事だし、それなら当日は友達と遊んで、週末に一緒に過ごしてもらえたら……なんて思っていた。

「ん？」

「えっと……」

けれど、それを言えばきつと宗形の負担になる。でも「はい、友達とご飯行ってきます」なんて軽々しくは言えなくて。

「……慶人くん、前にも言ったと思うけど、言いたいことは何でも言っていんだよ」

「あー……はい……その……」

平日だけど、帰宅して寝支度を終えた後の一時間か……二時間くらいもらえたら嬉しい……



…くらいなら言ってしまったてもいいだろうか。

「誘われてはいるんですけど、ちょっと悩んで」

「悩む？」

「……あの、夜帰って来てからでいいので、一時間くらい……かまってくれますか」

二時間なんて欲張ることはできなかった。普段から忙しい宗形の、しかも平日のど真ん中。

もしかしたら出張や、それがなくても残業になる可能性だってある。それなら一時間……ぎゅつと抱きしめてくれたら十分だった。

（二時間もあつたらえつちな気分になっちゃいそうだし……）

「帰ってから？ どこか行きたいところがあるのかな」

「……え？ いえ、総一郎さんの仕事ですけど……」

「ああ……そうか。誕生日の前日から翌日まで休みにしてあるよ。だから当日、もしお友達と出掛けるなら車を出すよと言おうと思って」

「え……」

驚きのあまり頭が真っ白になった。誕生日だけでなくその前後まで休みを取ってくれていたこと、しかもその間に友達と出掛けるならと移動のことまで考えてくれていたこと——でも一番驚いたのは、せっかくの誕生日、しかも休みまで取ってくれていたのに友達と出掛けることを何とも思っていない様子だということだった。

（出掛けちゃってもいいの……？）

友達を蔑ろにするつもりはないし、大切だと思っている。けれど、一年にたった一度の誕生日は宗形と過ごしたい。

「慶人くん？」

「あ……や……」

何と言ったらいいか分からなかった。もしかしたら誕生日に固執しているのは慶人だけなのかもしれない。

（そうだよ……だって総一郎さんは年も離れてるし……）

先日観たバラエティ番組で「誕生日なんて誰にでもあるし、放っておいても毎年来るものだから」と言っている人がいた。それについては共演者も驚いていたようだけれど、中には気持ちが分かると言った人もいた。その二人は確か、宗形と同年輩だったような気がする。

（それならあんまりこだわると重いかな……）

三日間もべったりしたいなんて言ったら負担に思うかもしれない。うざいと思われるのは嫌だし、重荷にもなりたくない。

「あ……えつと、その……」

でも、できれば一緒に過ごしてほしい。別にくっついていなくてもいい。ただ隣に座ってぼうつとテレビを眺めているだけでもいい。ただ宗形の存在を感じられる場所にいてほしい。

「……その……いい、行った方が……いいですか」

「え？」

「友達のところ……」

「誘われているだろう？」

「あ……」

「講義のあとそのまま居酒屋に行って、ご飯とお酒。それから次はカラオケにハシゴして——だったね」

そうだった。普段、慶人が聞いている音は全て宗形も聞けるのだった。ただ慶人が大学に行っている間は宗形も仕事だから、聞いていないこともあるはず……だと思っていたけれど。

「慶人くん、もう返事はした？ その話はまだしていないようだったから、メールでしたのかと思ったんだが」

「あ……いえ……総一郎さんと過ごしたくて……」

そこまで知っているのなら、全て正直に打ち明けてしまおうと腹をくくった。だって慶人に興味がなければそこまで聞いてはくれないだろうと思ったから。

「うん」

「でも、重いかなって。それに平日で総一郎さんは仕事だと思っていたので、それなら週末にちよつと時間をもらえる方がいいかなあって思ってた……」

休みを取ってくれているなんて知らなかったから、と言うと、宗形は「言ってなかったね」と詫びるように言った。

「ダメだね、この年になると言わなくても分かるだろうなんて考えてしまってた。慶人くんが生まれて来てくれた大切な日を、仕事して過ごすなんてできないよ」

「総一郎さん……」

きつと、傷付けた。宗形が言わなかったのは、慶人が友達との誘いを断るだろうと思っていたからだ。誕生日を宗形と過ごす当然のように思い、たとえ夜だけだったとしても家で宗形の帰りを待っている。きつと、ずっと慶人が友達の誘いを断る声を待ちながらマイクに耳を傾けていたはずだ。

「ごめんなさい、僕、」

「いや、私が言わなかったからね。それに私の体調を気にしてくれたんだろう？」

宗形はやはり大人だった。きつと悲しかっただろうにそんな素振りは一切見せず「嬉しいよ」と言って抱きしめてくれる。

「負担じゃないならずっと一緒に過ごしたいです」

「愛する子と一緒にいて負担になるはずがないだろう。いつも慶人くんからパワーをもらっているんだよ」

ゆつくり、言い聞かせるような言葉。頭も撫でられ、好きという気持ちが溢れ出す。

「総一郎さん……好き、大好き。一緒がいい」

「ああ。三日しか休みはないが、一日行けばすぐに土日になるから」

「ん……あ、そうだ、その、誕生日の前後は……？」

一体何のための休みなのだろう。もしかして、誕生日当日は出掛けてしまうかもしれないからと予備日を作ってくれたのだろうか。

「ん？ 前日から休みの方が、日付が変わる瞬間もゆつくりと過ごせるだろう？ 翌日は誕生日の余韻に浸れる。誕生日当日だけで休みが終わったらバタバタしてしまうからね」

そこまで考えてくれていたなんて嬉しい。けれど、そこで重要なことに気が付いた。

（僕、講義ある……）

当然平日なのだから講義が入っている。義務教育や高校のようにぎっちり埋まっているわけでもないし、普段からきちんと行っている所以この日くらい休んでも問題はないけれど――

（でもせっかく休むなら総一郎さんの誕生日に休みたいし……）

別にどちらも休んだって大丈夫だろうと思う。けれど、もしどこかで熱を出して休むようなことがあったら出席日数が足りなくなってしまうかもしれない。

「あ……」

「ああ、慶くんは普段通り大学へ行っておいで。往復は私の車になるが、それくらいは許してくれるだろう？」

「許す、なんてそんな……」

むしろ宗形の送り迎えなんて贅沢すぎる。

「講義の間に空きコマもあったね。食事はだいたいいつも同じお友達と一緒にようだが、火曜日は確か来ていなかったね？」

（すごい……）

計約3万6千文字です。

成人指定はキス・イン・ザ・ダークと新作玩具体験会ですが、それほど濃くありません。また、今年は誕生日当日ではなく誕生日に至るまでに焦点を当ててみました。短いお話ですが、お楽しみいただけたら幸いです。

誕生日短編 2020—サンプル—

gooneone (うーわんわん)

2020/11/14

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

ちゃんねる: gooneone

